

バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No:62



2014 年 5 月

NPO 法人 日本バスケットボール振興会

目 次

○ 理事会と定期総会を開催・・・・・・・・・・・・・・・・	2
○ 理事長退任にあたって・・・・・・・・小澤正博	16
ご協力に深く感謝申し上げます	
○ 今後の振興会活動について・・・・・・・・渡邊 誠	17
新理事長挨拶	
○ 女子世界選手権組合せ決まる・・・・・・・・	18
○ 1964 年東京オリンピック出場・・・・・・・・歴史部	22
オリンピックの座談会を開催（その2）	
○ 男子日本代表新ヘッドコーチ決まる・・・・・・・・	30
○ 3 x 3 バスケット世界選手権出場へ・・・・・・・・	32
○ 人物抄	
手嶋 昇さん・・・・・・・・	33
○ 会員だより	
バスケットボール湘南だより（その6）・・・・中瀬達雄	35
底辺バスケットの育成強化・・・・・・・・児島英倫	37
アメリカのバスケット事情・・・・・・・・秀子・Weir	39
○ 全国シニア交歓大会 in YOYOGI 大会要項・・・・・・・・普及部	41
○ NBL レギュラーシーズン終わる・・・・・・・・	43
○ Wリーグ全日程終了・・・・・・・・	47
優勝は JX-ENEOS	
○ 事務局だより	52
○ プラザ こぼればなし	53

1964年東京オリンピック出場

オリンピックの座談会を開催（その2）

[歴史部]

前号に続いて後篇をお届けいたします。

木内 1964年の東京五輪の日本の平均得点って何点だと思います？ 59点です。最近



は高校生だってそれ以上取りますよね。ちなみにその前のローマ五輪のときは67.8点ですから、それより10点くらい低くなっています。でもそれは日本の得点能力が落ちたんじゃなくて、ゲーム展開を遅くしてディフェンスに力を傾けたからだと思います。事実、ローマの時は90点くらいあった平均失点が東京大会では60点にまで下がりました。

個人の能力が非常に上がっていましたが、吉井さんは「どんなに日本の選手が大きくなっても、アメリカやヨーロッパの選手を上回るフィジカル能力を持つのは難しいだろう」と言っていました。例えば海保さんや志賀さんが2メートルあれば上回れるかもしれないけど、それは現実的ではない。一つひとつのプレーを丁寧に確実にやってくということが結果的に勝利に結びつくという考え方が自然にチームの中に生まれたんです。意図的にペースを落としたわけではないし、吉井さんから「もっとスローダウン」しろと言われたこともありませんでした。

江川 速攻が失敗して反撃を食い90対50で負けるなんていうケースが多々ありました。だからスローダウンしていったんだと思います。

木内 今はさかんに「スピード」、もっと別の言い方をすると「トランジションゲーム」が大事だと言われています。そういう攻撃方法が日本が勝つために本当にいいのか、即断はできないかもしれませんが、そういうこともしっかり考えてチーム作りをしてほしいですね。

中村 確か、東京オリンピックの時は30秒ルールがなかったんだよね。

海保 そうだよ。だってイタリア戦は最後2分くらい「海保！ 絶対ボールを取られるな」としか言われなかったもの。結局1ゴール差で勝てたけれど、あれはひどかったよ、もう！（笑）。

木内 日本代表が、ローマ大会では負けたけれど東京大会で勝てたというチームが2チームあり、それがイタリアとハンガリーでした。はっきりと確実に日本のチームが上向きになってきた時代でした。

中村 ローマ大会は残念ながら全部負けましたね。7試合やって7敗。東京大会は9ゲ

ームやって4勝5敗だった。進歩したといえると思いますよ。

小玉 うん、力は上がったと思うね。

木内 イタリアはローマ大会4位だったんです。アメリカ、ソ連、ブラジルの次にイタリア。東京大会の時も「ヨーロッパでソ連に次ぐ強豪国」ということで日本に乗り込んできました。そんなチームに勝てたというのは、当時の日本チームの金字塔だと思います。海保さんが言ったように非常に苦戦しましたが。

吉井ジャパンが終わった翌年にはマレーシアでアジア選手権がありましたが、ここで日本はフィリピンを破って初めて優勝しました。そのときのヘッドコーチの功績も大きいものがあったかと思いますが、吉井ジャパンのチームのレガシーがきちっと残っていたということが、アジアの中でも非常に大きく実証されたんじゃないでしょうか。

中村 あの大会はすごかったね。韓国に勝った試合は、相当荒れた試合になりましたね。「韓国の選手たちが試合後に攻めてくる」って、部屋でみんなたむろしてね。身体の大きい藤江と江川は部屋の前で待っていろって（笑）。

江川 私はポジションがフォワードセンターだったので、どうしてもリバウンドにから



むことが多かったんですけど、外国人選手とのポジション争いが非常にきつかったです。2メートル10センチくらいあって体重が100kg以上もある外国人選手と戦うのですから。現在は若干ひょろっとはしているけどサイズがあつてうまい長身選手が増えてきていますけど。こういったぶつかり合いを優位に戦っていいリバウンドを取れないと、アジアの代表にはなれないんじゃないかと思います。

私が現役の時はリバウンドの練習を相当させられました。でかいのが4、5人集められて、コーチが投げたボールをバックボードの前で取り合ってシュートを決めるんです。一人がそのときボールを取ったあとは残った全員が敵になり、敵はファウルしてもOK。そういう練習をさせられました。

あとは、スクリーンアウトの姿勢で壁を腕で押す練習もやりました。これは非常にプラスになったし、もっとやっていたらオリンピックでももう少し勝てたんじゃないかというくらいです。

これからの日本の選手も、おそらくリバウンドが最後の決め手になってくるでしょう。綺麗なシュートじゃなくて泥臭いプレーです。そう思いながら先日のオールジャパンを見たら、ゴール下でリバウンド争いをしているのは外国人だけで、日本の大きい選手は外から放るだけ。これはあまり国際大会の戦い方において参考にならないのじゃないかと思いました。

海保 国内リーグも、日本代表の強化にとってどういうやり方をするのがいいのかと議論してくれないと困るよね。

志賀 リバウンドは下(インサイド)のプレイヤーだけに任せるんじゃなくて全員で取るという意識を持たないと。

今の選手たちは下(ゴール近く)を外国人2人に任せて上(アウトサイド)の3人は外で黙って見ていますよね。リバウンドに参加していない。バスケットは一つのボールの取り合いのスポーツなのに。

海保 僕は昨年末に初めてbjリーグを見に行っただですよ。東京対富山の試合だった



かな。東京には外国人選手が5人、富山はコーチも含めて4人いて、外国人3人対2人で試合をやっている状態。こういうやり方をしている本当に東京オリンピックに役立つのかね。そんなことが現実だから「これやれ、あれやれ」って言ったって、普段は必要ないわけだよ。国内リーグではいい外国人選手を連れて来ればそれでいいんだもの。

司会 だから二つのリーグをなんとか一つにしないといけないと言われているんですけど、誰からもいい案が出てこないんですよ。私は、そのいいヒントはスペインにあるんじゃないかと思っています。

スペインは育成がきちっとしていて、今とても強いんです。スペインも1982年頃にリーグが統一したんだそうですが、そのときにスペイン協会はトップリーグから手を引き、審判の育成、コーチの育成、選手の育成に回るという手段を取ったんです。

私共は、2020年東京にオリンピックが来て嬉しいけどそれだけじゃない、国際大会に日本代表が常に出ているのが見たいんですから。

木内 あの当時、小玉さんや江川さんは高校卒業してすぐにナショナルチームの期待の大型選手としてやってきた。そこに至るまでの道筋の中でどんな目標を持って過程を経たのか。国内でもこれから楽しまない人材が出てきている時期なんで、体験談を教えてほしいな。

小玉 初招集されたのが大学1年生のときでした。ツノ(角田)と俺なんかは一種の強



化選手でしたね。江川さんはすでに高校から相当頑張っておられたけど、僕らはインターハイにも出ていませんでしたから。当時、同じような強化選手として34名が集められていました。大学1年生も10人位いたかな。190センチ位ある選手がとにかく集められました。

それから2年間で34人が20人弱に減っていき、新しい選手も招集されて、減ったり増えたりの繰り返しでした。僕は、技術はなかったけれど、幸いにも身長が195センチあるということが功を奏して選考から落とされなかったんです。

当時は何もわからずプレーしていたので、目標はありませんでした。とにかく、

いい食事をさせてもらえるチャンスをいただけたというのがやる気になっていましたね。当時はラーメンが一杯 30 円くらいでしたでしょうか。夜はいつもラーメンライスばかりという生活が当たり前でした。それが日本代表に招集されて合宿しますと、朝からおいしいどんぶり飯を食べさせてもらって、バターを相当上に乗せてともかく食えと。それなりのおかずもあるし、夜は夜でお肉も出るし、魚も出るし、こりゃそういう生活させてもらったら練習は最低限頑張りますよね（笑）。やっぱりハングリーだったんです。僕の場合はそこが原点でした。

先輩方にもからかわれていますが、大学に入った時にバスケットのプレーで本当にちゃんとできたのは、ランニングシュートとゴール下でリバウンド取ることくらいで、リバウンドシュートも下手すりゃ 5 本のうち 2 本は落とすぐらいの技術でした。そういうところからのスタートだったので、「言われたことをやる」という一つのスタンスが、少しずつではありますが身につきました。そういう長い目で見てくれていた人がいたんだと、今になってありがたく感じます。

東京オリンピックはとにかく必死で、代表選手の誇りなんてものを感じるヒマもなかったのですが、昭和 46 年の ABC で優勝したときは自信をもってプレーできましたし、代表選手の誇りもしっかり感じることができました。核となってチームを引っ張っていった自負心があったんです。

当時は立教の服部君や沼田君を成長させようとトライアルしていたおかげで、僕は相手のセンターフォワードというか、一番得点力のある選手を守るディフェンスマンとして活躍することができました。オリンピック前は何もできなかったところから、それだけの技術が培われたというのは、自慢ではないですが大変自信になりました。

ちゃんと一つひとつ正確に指導を受けていく。もう一度原点に戻って指導とは、強化とはというものを作りこんでいく姿勢を今の協会や代表チームにも求めたいですね。

司会 これだけ熱く語れる方々がいて、それが日本代表強化の現場に普及できないというのはどうしてなんだろうと、いつも歯がゆく思っておりました。まずは冒頭で佐室会長が発言されたとおりの、経験者の意見を知ってもらうことが必要ではないでしょうか。若い世代の人たちに、オリンピックに出た人はこんなことを考えているんだよということを伝えられたらと思います。

そして吉井さんというコーチのことも伝えなければなりません。東京オリンピックの報告書を読むと「吉井さんを男にしよう」と日本が全部一本に固まっていたということが如実に分かります。2020 年に向けて指導者をきちんと決めて、その人を日本全体で応援していこうじゃないかというのが、今回座談会を開い

た目的の一つだと思いますが。

吉井さんは、将来に向けての提言ということで4つのことを述べられています。その一つはナショナルチームの存続。2番目は国際交流の必要性。これは国際事情も変わり、かなり現実的になりました。3番目はコーチングスタッフの拡大とその継続性。4番目は一般のレベルアップ。

これはどういうことかという、選手やスタッフだけの強化だけでなく、バスケット文化を日本に根付かせるということではないでしょうか。

江川 オリンピックに出ることは、戦争で亡くなった父親の遺言でした。父は「オリンピックに出たい」ということを言って逝くなりました。

福島の会津から東京に出てきて、日本代表になるためにはとにかく強い学校に行かなければということで、強豪の中央大学杉並高校に入学しました。夢はオリンピックに出ること。大学も、インターハイで優勝したり名を成した連中がごそっと入ればおそらく代表候補の中に何人か入れておこうとなることを狙って、とにかく強かった明治大に進みました。

代表になってからは、バスケットをやっていくということにとにかく一生懸命だったけど、気持ちのハングリーさはものすごく強かったです。だから練習は辛くなかったです。きつかったけれど辛くはなかった。いつ落とされるかというところにいましたから。

でも、本当に「オリンピックに出られて良かったな」と思うようになったのは最近のことです。会社に入ってから、この経験が仕事をする上で非常に大きな財産になっていきました。

海保 サッカーJリーグでは今「夢クラス」という取り組みを行っています。選手が小学校に行って自分の生い立ちを「いいとき」と「悪いとき」をグラフにして子供に解説するんです。

僕の最後のいい時は東京オリンピックでした。その前は世界選手権のメンバーに決まるとコーチから言われて喜んだけど、ふたを開けたら選手から落っこちていてね。先にも話しましたが、大型選手を連れて行くからって…。上背が小さいだけに苦労しましたよ。

そして、東京オリンピックの1年後に肺結核になって選手をやめたんですね。そのときは本当に、奈落の底に落ちたような気分でした。仕方なくチームをマネジメントしていく立場になったんですが、これがまた面白かったし役にも立った。住友金属の監督をやっていたときは天皇杯や日本リーグで何度も優勝しました。会社を説得して選手を取ってチームを強くするというのをやるにあたって、選手時代の経験がものすごく役に立ったんです。

木内 ジュニアも含めて2020年へ向けて夢を持ってほしいですね。どんな夢でもいいから、選手一人一人が自分でしっかり夢を描いて作ってほしい。そして

その夢への精進を信じてやり続けていくことです。精進の結果がいつ報われるかどうかは誰にもわからないと思う。バスケットボールとして報われるか、また違った分野で報われるかもしれない。でもそれを恐れずに精進してほしい。夢を持って追求して、リスクを恐れず突き進んでほしいなと思います。

志賀 私自身は、当時夢なんてものがあつたでしょうか…。背が大きいからと始めたバ



スケットで、高校で2年連続インターハイに出場してベスト8にも入りました。バスケット部の先輩には、メルボリン五輪の代表になった大平さんという方がいらっしゃいました。オリンピックに出たいとは思わなかったけれど「バスケットがうまくなったら海外に行けるんだなあ」というようなことは考えましたね（笑）。

大学進学もする予定はなかったのですが、同級生の誘いで明治大学を受験し、進みました。とにかくバスケットが好きだったんでしょうね。普通にやっていたら1年生からレギュラーになりまして、リーグ戦に使ってもらっている間にローマオリンピックの代表に選ばれてしまったんです。

本当に夢はなかった。ただただバスケットが好きだったということで、色んな練習も耐えられたし、それが面白くなってきました。でも代表活動をしている間はとにかく「相手に勝つんだ」「どんなことをしてでも勝つんだ」くらいの気持ちで練習に打ち込んでいたのが実際のところでしょうか。

今は月に4回ほど、子どもたちにバスケットを教えています。遊びみたいなものですけどバスケットを嫌いにならないように、続けて行ってほしいという思いで取り組んでいます。

中村 今の若い人たちと我々とは価値観がずいぶん違います。彼らに「日の丸を付ける



ことはこれだけ素晴らしいんだよ」ということをどうやって教えられるかっていうところがポイントなんですよね。我々は日の丸にプライドを持っていました。変な民族意識を抜きにしてね。やはり「母国のためにやる」ということに重みがあつたので、今の若い人たちにもそういうことをどうにかして教えてあげたいです。

僕自身は高校からバスケットを始めました。中学は野球をやっていたけど「バスケットをやっていたら海外に行けるぞ」という噂が流れて、結果的には行けなかったんですけど（笑）。大学もそれほど強いチームじゃなかったですから、結局吉井さんに見出してもらって、吉井さんに教わったバスケット人生だったんですよね。当時とはとにかく必死でした。必死にバスケットをやったというのが一番の記憶です。

10年くらい前までは自分の出身大学でバスケットを教えていたんですが弱小チ

ームで、あまり勝とうという強い気持ちが沸き上がってこないチームでした。ただ社会人になったときに、いくらかでもバスケットを通しながら色んなことが社会人の先輩として教えられればなということは考えていましたかね。若い人にどういうことを教えていくのかというのは、現在非常に難しいことです。

小玉 僕も中村さんと同様に、中学の時に野球をやっていました。あの時代は高校入学の時に、現在のセンター試験のようなものがありまして、そのテストの結果、滑り止めを受けずに公立高校を受けたら落ちてしまいまして…。なんとか滑り込みで逗子開成という高校に行ったんです。そんなもんですから「もう野球なんかやっていたらいいか！」となっていたところを、教育大を出られた先生に誘われてバスケットボールを始めたんです。高校に落ちなかったらオリンピック選手にもなっていなかったでしょうね（笑）。

東京オリンピックのときは、先ほども話したように誇りも何もなく、とにかく最後の最後までへばりついていたら、落とされずに残ったというだけでした。とは言いながら開会式のときは感慨深かったですね。まだいろんなことが分かっていない歳だったと思うんですが、ああいう開会式に出て、国旗が上がるところを見る。そういうことの経験はかけがえのないものです。その後のアジア選手権にしても、日の丸を見るとなんとなくジーンとくるようになりました。

ましてや、オリンピックが終わった翌年のABCで優勝したときは事件でしたよ。当時絶対的に強かったフィリピンに勝っちゃったんですから。上の世代の方には「よくやった」とたくさん言われましたし、優勝して国旗が真ん中に上がるのを1回でも見てしまいますと、それがプライドや自負心つながって「次も頑張ろう」というプラスの意欲が生まれてきます。

実は、その次のときに失敗してメキシコ五輪に出られないという失態がありましたけど、その落とし前は、次の東京でやったABCでつけさせてもらって、帳尻は取ったかなという。そういう前後をしっかりとやりきるという姿勢や意識も、東京五輪からABCにかけて培われたプライドが生んだものなのかもしれません。一度ナショナルチームに入ると、そういう精神的な構成まで含めて変わってくるものです。それは非常に大きいものだと思います。年代ごとに多少考え方は違うかもしれませんが、そういったことは不変なものではないでしょうか。

司会 最後に質問があります。皆さんが最後にバスケットをやったのはいつですか？

江川 一昨年ですかね。振興会の大会に参加させてもらいました。

海保 肺結核になったのが昭和40年ですから、そこが最後です。そのあとは遊びでもプレーしていません。

木内 記憶がないくらいですね。

志賀 実は明後日に越谷の方で試合があるんです。やりたくはないんですけど引っ張り

出されました（笑）。去年もちょっとやりました。

中村 やっていないですね。学生を教えているときに、ちょっと早めに体育館に行ってフリースローを打ったけど、届かないんですから（笑）。3、4年前にゴールの下で軽いジャンプシュートを打ったのが最後ですかね。

小玉 僕も江川さんと同じく、振興会の大会です。SOSというチームでプレーしました。試合はもう最近引退しましたが、2020年で二度目の東京オリンピックのときに、ちょうど77歳。そのときまで元気でいられるように、健康維持のために練習だけはしておこうかなと思っています。

司会 本日はお忙しいなかお集まり頂き誠に有難うございました。大変有意義な座談会となりましたことを感謝申し上げます。



むすびに

1964年東京オリンピック出場の役員選手の皆さんには、70歳を越したにもかかわらず、2020年東京オリンピックへ向けて熱い思いを語っていただきました。

この東京オリンピックの成功は、指導者の確立、予算の安定化、選手のモチベーションの高さに加えて、当時のハングリーさも欠かせない要素であったと感じました。

来る2020年東京オリンピックは、開催国としてまず男女ともアジアにおける位置づけを勝ち取ることが重要課題です。そのために指導者の確立、選手強化、審判の協力など日本協会をはじめあらゆる関係者の奮起が必要な時ではないでしょうか。

この後歴史部では、過去のオリンピックに出場された役員・選手の方々にご協力いただきながら、バスケットボールに対する思いを座談会を通じてまとめたうえ、読者のみなさんにお届けする予定であります。

人物抄

手嶋 昇 さん

[編集部]



手嶋昇(ノボル)さんは、大正15年(1926)5月、愛媛県西条のお生まれで今年米寿を迎えられお元気である。西条の小学校から四国三島中学校(旧制)へ進まれたが、バスケットボールは小学校5年生の時、担任の先生がバスケットをやっていたことから始められた。中学時代はバスケットとともに剣道にもめりこみ3段まで登り詰めたが、当時から背丈が大きく小学校6年生時に172cmの身長があったという。

三島中学校卒業後かねて目指していた東京体育専門学校(旧制高校のうち筑波大学)へ進学されたが、この頃バスケットの路へ進むべきか武道の路へ進むべきか迷われたそうだ。

東京体育専門学校で学ぶのも束の間、太平洋戦争が激しくなり1年2ヵ月後に軍隊へ召集され四国丸亀の分隊に配属されたが、体格とスポーツのお陰で相撲、銃剣術、行軍等はいつも一人天下だったとか。終戦後復学した際は食料不足など戦後の混乱期で、学生生活も苦労されたが、バスケットボールの練習だけは熱心に続けられた。

東京体育専門学校卒業後は教員として四国松山の新田高校へ赴任、当然のことながらバスケット部を指導し西日本高校選手権大会で準優勝している。昭和24年(1949)、若さに任せて教えていてもだめなことを悟り、新田高校を退職して再度上京し東京大学体育研究室助手として働こうとした。しかし当時の報酬は月2500円、東京で生活していける状況になくそれを辞退、その後東京都教員採用試験を受験して合格、都立蔵前工業高校に採用された。

その当時蔵前工業高校にバスケットボール部はなく、手嶋先生(以降先生)が面倒をみてバスケットボール部を創設、コートは野外で回りは焼け野原と云った惨状だった。高校生を熱心に教えた結果、年を追うごとに強化され創部10年目の福井インターハイで3位に輝く。同時に教員のバスケットボールにも参加し、全国的にも強かった東京教員クラブの一員として活躍されるとともに、他高校のコーチも引き受けられている。

昭和26年(1951)に東京高体連バスケットボール部の役員となり、ここから活躍の場が大きく広がり、審判やコート主任など高体連発展のために尽力。全国高体連副部長としてまだ国交のなかった韓国へ高校生たちを遠征させ、戦後初めての日韓高校交流試合を実現させた。

昭和39年(1964)に開催された東京オリンピックでは、審判役員として予選リーグの笛を吹かれテーブルオフィシャルコミュニティとして活躍された。

高校バスケット関係で活躍してきた先生に昭和41年(1966)一大転機が訪れる。それまで短期大学だった日本女子体育大学が4年制の認可を受けた時である。当時の学長で、かつて東京体育専門学校時代に指導を受けた鶴岡さんから懇請されて助教授として球技第一研究室主任に赴任することとなる。

大学に赴任した当時、女子大学特有の風土は公立高校に勤務していた時とは大きく変わっており、正義感の強い先生の肌には合わなかったようである。高齢の非常勤講師が多く、若手の教員が先生を含めて3名位しかいなかったため、大学の改革を行うため若い助教授

陣は相当苦労させられたらしい。

就任1年目はバスケットボールの理論と実技を教えるだけで、クラブ活動には関係なかったゆえ比較的時間が取れ、その間他の高校へバスケットを教えに行ったりした結果、受験生が増えて学生が増え始めた経緯もある。

こうした地道な教育が功を奏して、学生たちが生き生きと学ぶようになって大学は活性化、学生も増えてきた2年目からバスケットボール部活動を指導することになった。部員の急増と面倒を見る範囲が急に広がったため、一人ではどうにもならず、大学にも掛け合って母校である教育大学から大門芳行氏を推薦してもらい、球技第一研究室の助手として採用してもらっている。

この当時、部員数が100名を越す大所帯となって狭い体育館での練習もままならず、一軍を30名に絞り、残りを二軍と短大生に分けて練習時間の調整を行ったりした。ところが女子学生特有のなにかがあって、レギュラー（一軍）を目指す学生同士が足を引っ張り合うような出来事が発生し、その解決に悩まされたこともあった。しかし「決して腹を立てない」という奥さんとの約束もあって耐え忍んだとか。その苦い経験がものを云ったわけではないと思うが、筆者が知る限り先生が怒ったところを見たことがない。いつも笑顔で物静かな話し方は、ものを言わなくても相手を制するに十分である。

あるときアメリカへ視察に出かけた折に女子学生のサマーリーグを見たら、審判は殆ど女子が笛を吹いており、審判の経験もある先生はここであるヒントを得たという。すなわち女子審判部を作るということであつた。

当時日本の審判界で笛を吹くのは殆どが男性で、女子大学で審判部を作って女性審判を育成することは初めての試みだった。100名を越す学生の中から審判をやる希望者を集めて育成を始めたが、理論はともかくとして実技となるとそう簡単にはいかなかった。そこで日本協会審判部に相談を持ちかけ、初代の審判コーチに日比野明氏（現振興会副会長）を招請することに成功、日比野氏は当時国際公認審判で多忙だったが引き受けOKとなり、女性審判の本格的育成が始まった。

ここでも先生の教育に対する熱血ぶりが発揮され、「審判を志すなら公認審判の資格を取得することを目標にせよ」と学生たちを鼓舞し、そのお陰もあってその後公認審判の資格を取得した卒業生は数多い。審判部が軌道に乗ったことによって、練習時間の調整といった悩みが少なくなるのと同時に、都内の中学校大会から審判派遣の要請をされたり、全日本総合選手権大会や実業団大会のテーブルオフィシャルを依頼されるなど、まさに一石二鳥の成果を得ている。（女性審判育成については本誌でも既に取り上げている）

その後、身体の一部を故障した学生から希望を募ってコーチング部を創り、学生たちにコーチングの研究をさせると、結果的に都内の小中学校からコーチの依頼を受けるようになり、多い時は7～8校にコーチを派遣する実績を得る。

順調だった大学教授時代の昭和60年(1985)、二階堂高校の校長兼任を要請され引き受ける。当時二階堂高校の運営は時代の波から取り残されて、旧態依然とした教育環境で生徒数は減少の一途をたどっていたが、先生の校長就任によって学校の設備はもとより、教職員の意識改革、生徒自身の自覚を芽生えさせ、学業とスポーツの両立を求めた結果、二階堂の体操選手がインターハイに出場して優秀な成績を挙げたのに続いて、1988年ソウルオリンピックに日本代表体操選手として出場を果たしたりしている。

先生は、かかりつけの医者から「外出中に転倒して骨折でもしたら一生寝たきりですよ」と脅かされ、天候が悪い日は外出を控えていますので時々失礼しますと笑っておられた。



アメリカのバスケット事情

秀子・Weir

私は、旧宇治山田高校から奈良女子大に進学し、その昔文理大(現筑波大)の名手、石山平作先生の門下に入りました。石山先生は晩年御茶ノ水女子大に移られ、日本協会の理事を務められました。石山先生の熱意と厳しい練習の下に奈良女子大はめきめき上達、全国大学10位に食い込むことができました。その奈良女子大シニアのときに、日本代表男女のチームが東南アジア大会に招待され、幸いなことに私も選抜されて、興銀を主体とした女子のチームに日紡、東芝、三井、私が補強され青井水月氏をコーチに、男子チームとともにタイのバンコクに向かいました。

東南アジア8カ国のリーグで、決勝で台湾を下し優勝、男子はフィリピンが優勝し、日本は2位でした。帰国して大学を卒業、興業銀行に入社、再びアジア大会遠征チームに加わり、全国実業団7連勝のうちの3連勝を果たし引退。その後機会あって再び渡タイし、東南アジア戦で戦ったタイのチームに参加、キングスカップで優勝し、ベトナムのサイゴンで行われた東南アジア大会にタイのチームとして参加、このとき始めて韓国商業銀行が参加し、その上背とスピードで優勝。これを機に私のバスケット生活にピリオドを打ちました。

アメリカ東海岸に位置するワシントンDC、あるいはホワイトハウスのあるワシントンと云えば、今や世界の誰もが知る所ですが、そこから西へ60キロ、ヴァージニア側に私は1970年以来、居を構えております。又ここはダレス国際空港に近く、地の利のよさから、日本から多くの友人知人が立ち寄ってくださいました。

しかし80年後半から90年にかけて、日本の経済にかげりが見えてきて、以来来訪客は途絶え、静かな日々に戻りました。ヴァージニアは緑の多いきれいなところです。

アメリカで年間を通じて放映されるスポーツ番組の多くの種目が、世界のランキングを競っている点で非常に面白い。

3月に行われた全米大学バスケットボール選手権“NCAA”は一名“March Madness”と呼ばれるが、その名の通り多くの出来事を残し、日本語で言うなれば悲喜こもごもといったところ。毎年のことながら観る者を大いに楽しませてくれた。

まずはこのとてつもない大国から、64のチームが選ばれ四つの地域に分かれて、63ゲームを競う訳であるが、東西南北のチームがFinal Fourと呼ばれる準決勝でやっと顔を合わせることになる。今年まず印象に残ったのは、どのチームも実力伯仲で、延長戦も多くふとした運で勝敗が決まってしまった、というゲームもかなりあった。これもやはり“March Madness”なのであろう。また、近年“アメリカのバスケットは黒人”という印象が定着していたが、白人プレイヤーが増えたことも印象に残った。正しくは1997年か

ら、3ポイントのルールが敷かれ、ゲームの運び、内容が変わったことは、多分日本も同じことかと思われるが、3ポイントを狙うがゆえに、得点のトータルが低下——3ポイントはミスも多い——しかし、その反面、相手チームに20数点のリードをしても安閑とはしていられず、又逆に相手チームにリードされても悲観の必要はなく、間もなく点差は縮まるとも云える。7フィート余りのプレイヤーもゴール下やポストにこだわらず、どんどん外に出て来て3ポイントを狙う、というのが今日のバスケットと云える。

決勝戦のコネチカット大対ルイヴィル大戦は終始伯仲したゲームにあつて、コネチカット大は一度たりともルイヴィル大にリードを許さなかった点があつたべしと云うべきだった。

なお、このコネチカット大は、チームの学業成績のトータルがNCAAの基準に達しなかったとして、昨年公式試合のすべてに出場停止という憂き目にあっている。それにも拘わらず全員で学業に励み成績をあげて練習に励み、全米学生選手権を獲得したことは何と素晴らしいことでしょう。

アメリカの大学はバスケットさえ上手ければ、すべてはOKと思ひ違ひをしている他国の人たちも、アメリカの大学の制度の厳しさを見直して欲しいものである。

バスケットのシーズンは3月で終わり、9月の新学期まで高校、大学ともにチームとしての練習は禁止されており、長い夏季の休暇をある者は学業に励んで単位を取る者、アルバイトで学資を稼ぐ者などなど。

又、この期には有名コーチがトレーニング、スクールを開くことも多いので、それに参加して個人技を磨いたりもする。たいていの高校は体育館を二つ持っていて、一つは試合用、ひとは練習用でこちらにはバスケットが6ゴール、ボールは全員に1個ずつ与えられ、あるときは2個ずつ与えられて個人の練習にも熱が入っていた。体育館は通常鍵がかかっていて、自由に出入りして勝手に練習することはできない。

[元興業銀行・全日本代表]



For the real game

「プレーヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」
私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに
世界に類のない、ボールとスポーツエキップメント・メーカーとして
常に完璧な製品づくりを目指しています。





渋谷センター街では、スポーツ振興と青少年の健全育成を基本理念に、国際色・ファッション性を考え合わせ、メイン通りの名を「バスケットボールストリート」とし、2012年 秋にはシンボルとなるモニュメントも設置いたしました。

5年10年と時をかけて、、、
この「バスケットボールストリート」通称「バスケ通り」
を定着させていきたいと考えています。



渋谷センター街